



小川商人の雄飛

宿場町として栄えていた頃の面影を残す小川町商店街。ここには、今なお立派な町屋が点在し、かつての繁栄ぶりをうかがい知ることができる。

小川町史には、この地が古くから地域経済の中心的な役割を担っていたことが記されている。江戸時代、細川藩政時代には薩摩街道の宿場町として繁栄。山や海の産物の集散地として繁栄したこの頃、海岸線はこの辺りにあり、不知火海へとつながる砂川を使った水運で、長崎な

光は遮られ影を落とす

しかし、1700年代の八代平野干拓により、海岸線はこの地から徐々に遠のいていく。

また、鉄道や国道3号は離れて建設され、車社会が発展した昭和40年代には、商店街の衰退が始まる。さらに郊外型ショッピングモールが登場するなど、消費行動が変化。空き家も増加

ぽっかりと空いた空洞

追い打ちをかけるように、平成28年4月、熊本地震が発生。

震度6強の揺れが2度も市内を襲い、商店街の大部分も被災してしまった。大きな被害にあった建物が次々と解体され、通りは歯の抜けた痕のようにぽっかりと穴が空いた。中には築300年にも及ぶ町屋も解体され、地域の宝である町の風景は輝きを失ってしまった。



昭和32年 人であふれかえる初市——小川町商店街では多くの店が軒を連ねていた

町並みの中に残る光と影

商店街を歩くと見えてくる光と影。
歴史的な町家がいくつも点在する傍らには、ぽっかりと空き地が。
経済の衰退の裏には、高齢化や人口減少などの問題を抱えていた。



現在の小川町商店街——熊本地震後はさら地が増えた